

「イエシュアの降誕」

マタイの福音書 1:1~2:12

はじめに

今日取りあげる箇所は、世間一般でもクリスマスの物語として広く知られるイエス・キリスト、すなわちメシアであるイエシュアが人としてこの地上に来られた、お生まれになった、「初臨」と呼ばれる出来事についての記述です。世界で最も有名な祭りであるクリスマス、その起源として知られるこの出来事は、確かに重要な出来事であることには違いないのですが、この出来事が神のご計画の目的、完成というわけではありません。イエシュアはその神のご計画の完成である「神の国、御国」を宣べ伝えるためにこの地上に来られた、降誕されたのです。ですから、このイエシュアの降誕の出来事の中にも、「神の国」のご計画を指し示す、何らかの情報、メッセージが表されているのではないか、という考えに基づいてこの箇所に取り組みました。その結果は以下のとおりです。

1. ヨセフ

マタイの福音書 1章、その冒頭は「[1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。](#)」というタイトルから始まり、一見するとこの系図はイエシュアがアブラハムの子孫であるイスラエル人であり、またダビデ王の血を引く正統な王位継承者であることを示すものであるかのように見えます。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

- 1:2 アブラハムがイサクを生み、イサクがヤコブを生み、ヤコブがユダとその兄弟たちを生み、
1:3 ユダがタマルによってペレツとゼラフを生み、ペレツがヘツロンを生み、ヘツロンがアラムを生み、
1:4 アラムがアミナダブを生み、アミナダブがナフシオンを生み、ナフシオンがサルマを生み、
1:5 サルマが[ラハブ](#)によってボアズを生み、ボアズが[ルツ](#)によってオベデを生み、オベデがエッサイを生み、
1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。ダビデが[ウリヤの妻](#)によってソロモンを生み、
1:7 ソロモンがレハブアムを生み、レハブアムがアビヤを生み、アビヤがアサを生み、
1:8 アサがヨシャファテを生み、ヨシャファテがヨラムを生み、ヨラムがウジヤを生み、
1:9 ウジヤがヨタムを生み、ヨタムがアハズを生み、アハズがヒゼキヤを生み、
1:10 ヒゼキヤがマナセを生み、マナセがアモンを生み、アモンがヨシヤを生み、
1:11 バビロン捕囚のころ、ヨシヤがエコンヤとその兄弟たちを生んだ。
1:12 バビロン捕囚の後、エコンヤがシェアルティエルを生み、シェアルティエルがゼルバベルを生み、
1:13 ゼルバベルがアビウデを生み、アビウデがエルヤキムを生み、エルヤキムがアゾルを生み、
1:14 アゾルがツアドクを生み、ツアドクがアキムを生み、アキムがエリウデを生み、
1:15 エリウデがエレアザルを生み、エレアザルがマタンを生み、マタンがヤコブを生み、

しかしこの系図は以下のように締めくくられています。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

1:16 ヤコブがマリアの夫ヨセフを生んだ。キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった。

系図は「イエスは、このマリアからお生まれになった。」と締めくくられています。しかし記されているのはどう見てもマリアではなく、その夫となるヨセフに至るものとなっているのです。非常に不可解な表記の仕方です。もちろん実際にマリアはヨセフによってではなく、聖霊によってイエシュアを身ごもります (1:20)。ですからこのように記すしかないのですが、これではイエシュアがアブラハムの、またダビデ王の子孫であるという事実を主張した系図としては、いささか説得力に欠けます。またマリアについてですが、ここでは彼女の家系についての説明は一切ありません。またマリア以外にこの系図には、タマル、ラハブ、ウリヤの妻、という女性たちの名が記されていますが、みな異邦人、あるいは遊女のような姦淫の女で、イスラエル人が忌み嫌うような女性の名ばかりが記されています。ですからこれではマリアもまたそのような女性であるかのように見えてしまいます。

ともかくこの系図は、イエシュアの系図というよりも、むしろダビデの子ヨセフの系図と呼ぶべき内容です。実際に 1:20 で彼は御使いに「ダビデの子ヨセフ」と呼ばれたことが記されています。実はこのマタイ 1 章ではヨセフについての記述が最も多く、出来事としては明らかに彼を中心に描かれています。1 章に記されたヨセフについての情報をあげますと、

- ・ヨセフはアブラハムの子孫、ダビデの子孫である (系図)。
- ・ヨセフの父の名はヤコブである (1:16)。
- ・ヨセフはマリアと婚約していた (1:18)。
- ・ヨセフはマリアが聖霊によって身ごもったことを知った (1:18)。
- ・ヨセフは正しい人である (1:19)。
- ・ヨセフはひそかにマリアと離縁しようと思った (1:19)。
- ・ヨセフは思い巡らした (1:20)。
- ・ヨセフは御使いに「ダビデの子ヨセフ」と呼ばれている (1:20)。
- ・ヨセフは夢を見た (1:20)。
- ・ヨセフは眠りから覚め、マリアを妻として迎えた (1:24)。
- ・ヨセフは子が生まれるまでマリアを知ることはなかった (1:25)。
- ・ヨセフは子をイエスと名づけた (1:25)。

マタイの福音書 1 章は、系図の部分を除けば非常に短い箇所ですが、このようにヨセフについての情報が非常に多く記されています。従来のクリスマスの物語では、イエシュアやマリアほどには注目されることのないヨセフですが、その原点が記されたこのマタイの福音書 1 章は、実は彼についての描写であふれているのです。イエシュアはマリアから生まれたと記しながらも、ヨセフを中心に描かれているという、この不可解な記述の意図とは一体何でしょうか。その理由としてまず考えられるのは次の記述です。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

1:17 それで、アブラハムからダビデまでが全部で十四代、ダビデからバビロン捕囚までが十四代、バビロン捕囚からキリストまでが十四代となる。

最初の「アブラハムからダビデまで」、これは系図のまとめとして理解できます。しかし次の「ダビデからバビロン捕囚まで」そして「バビロン捕囚からキリストまで」という「バビロン捕囚」、つまり人物名ではなく歴史事実を記すという、これはもはや系図ではなく、イスラエルの歴史です。イスラエルの歴史は父祖「アブラハムから」始まり、そして国としては王「ダビデから」確立したということが表されていると見るならば、これはもはやヨセフの系図ですらなく、「十四代」という期間で区切られたイスラエルの歴史年表です。このように、ヨセフの系図がイスラエルの歴史にすり替わっていくようなこの記述の流れは、まるでヨセフとイスラエルを重ねて見てみなさい、と言っているようです。そう考えるならば、ヨセフの父の名が、神からイスラエルという名を賜ったあのヤコブ、アブラハムの子イサクの子ヤコブと同じ名であるということにも意味があると考えられます。

またこの「十四代」という数にも意味があると考えます。I 歴代誌 1～3 章を見ますと、数に若干の相違が見られますが、マタイはこれを「十四」と強調しているように見受けられるからです。この「十四」という数、この言葉は本来、以下の出来事で用いられました。

【新改訳 2017】 創世記

14:4 彼らは十二年間ケドルラオメルに仕えていたが、十三年目に背いたのである。

14:5 そして十四年目に、ケドルラオメルと彼に味方する王たちがやって来て…打ち破った。

これは「ケドルラオメル」という王に仕えていた者たちが、この王に背き、打ち倒そうと試みたが、逆に敗れてしまったという出来事です。ここに聖書で最初の「十四」が使われています。ですからこの数、この言葉には本来、自分に敵対する、反抗する者を打ち倒す、これに勝利するというような意味が指し示されていると考えられます。神はかつてイスラエルの父祖アブラハムにこのように約束されました。

【新改訳 2017】 創世記

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

ですから「十四代」という言葉を強調したこの系図には、キリストすなわちメシアであるイエシュアが、ダビデの子として王となるその時、神がアブラハムに約束されたとおりに、イスラエルに敵対する者はすべて打ち負かされる、滅ぼされるということが表されていると考えられます。これは現在の世界の情勢からは到底信じられないような話ですが、神はやがてイスラエルを世界で最も強大な国、国々を治める、祝福する国とすることをここに示しておられるのです。

それではさらに、このヨセフにイスラエルを重ねつつ、つまりヨセフをイスラエルの民の「型」として見ながら、この 1 章に記されたヨセフについての出来事を見てみましょう。

2. マリア

【新改訳 2017】 マタイの福音書

1:19 夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしなくなかったので、ひそかに離縁しようと思
った。

まず「ヨセフは正しい人」であったという記述について。この「正しい」という意味のヘブル語ツァッ
ディーク(צדיק)は本来、ノアの箱舟を造った、あのノアを指して用いられた言葉です。

【新改訳 2017】 創世記

6:8 しかし、ノアは【主】の心にながっていた。

6:9 これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった。ノアは神とと
もに歩んだ。

このように、ツァディークとは神の御心にながう、全き者、神とともに歩む者という存在を指し示す言
葉であると言えます。もちろんヨセフ本人がそのような人物であったとは思いますが、彼についてのこの
記述はイスラエルの民の「型」であると考えれば、イスラエルの民が「世代の中であって」すなわち
全ての国々の民の中から、神に特別に選ばれた聖なる民、神の所有の民であることが表されていると考え
られます。

次にヨセフは、婚約者であった「マリアをさらし者にしなくなかったので、ひそかに離縁しようと思
った。」とあります。状況としては、マリアは聖霊によって、つまりヨセフによる子ではない子どもを妊娠
したのですから、周囲の人々にはそれが理解されず、これは姦淫の罪にあたりと見られて、彼女が罰せら
れるかもしれないとヨセフは考えたようです。彼はマリアと「ひそかに離縁しよう」としました。そんな
状況の中、ヨセフはいろいろと思いつらしながらも、眠ってしまったようです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

1:20 彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨ
セフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるので
す。

1:21 マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪から
お救いになるのです。」

1:22 このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。

1:23 「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」そ
れは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。

マリアは聖霊によって身ごもり、妊娠しました。これは一体何を表しているのでしょうか。ヨセフがイスラ
エルの民を表す「型」であると考えれば、このマリアはやはり異邦人の教会、イエスはキリスト、イ
ェシュアをメシアとして信じる教会を表していると考えられます。最初の系図の箇所、マリアがまるで
異邦人と同じであるかのように記されていたことの意図がここに繋がると考えられます。私たち教会とは、

イエシュアをメシアと信じる信仰を内に宿した存在です。それがこのマリアがイエシュアを身ごもっている姿には表されていると考えられます。しかしヨセフはそんなマリアと離縁しようとした。ここに、ユダヤ人とも呼ばれるイスラエルの民が、イエシュアを信じず、教会を受け入れないという、今日もなお続く状況が表されていると考えられます。その理由は、イエシュアはメシアであるというこの真実が、彼らイスラエルの民の目には隠されているからです。ヨセフはマリアと「ひそかに離縁しよう」とありますが、ヘブル語ではここに「隠れる、隠す」という意味のサータル(נִתְּרָ)という言葉が使われており、この言葉は本来、神の御顔を避けて隠れ、地上をさまよひ歩く、という意味があります(創世記 4:14)。国土を失い、離散の民となったイスラエルがここに表されていると言えます。またヨセフは夢を見たともありますが、それはすなわち、彼は眠った、つまり目を閉じたということであり、ここにもイスラエルの民が、イエシュアがメシアであることに目が塞がれている、見えない、理解できない事実が表されていると考えられます。

しかし、そんなイスラエルの民の目が開かれる、眠りから覚める日が来ます。それが次に表されています。

3. 初臨と再臨

【新改訳 2017】 マタイの福音書

1:24 ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、
1:25 子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。

ヨセフとマリア、すなわちイスラエルと教会は、ヨセフが「眠りから覚め」たように、イスラエルの民の目が開かれる時に結ばれ、一つの民となります。またそれは同時に「子を産む」つまりイエシュアが見える形で、肉体を持って現れる時でもあり、またイスラエルの民が「その子の名をイエスと」呼ぶ、神の御子イエシュアの御名を、彼らが呼び求める時でもある、という神のご計画が、この出来事には表されていると考えられます。イスラエルと教会は、イエシュアによって一つとされるのです。このように、イエシュアの降誕、すなわち初臨の出来事の中に、すでにイエシュアの再臨の事実が指し示されているということです。このイエシュアの再臨こそが、神のご計画の完成であり、神が目指しておられ、私たちが求めるべき「神の国」の成就、実現する時なのです。イエシュアのご降誕の出来事は、それ自体も確かにすばらしい出来事ですが、ただそれだけに目をとめてはいけません。このように、確かに神は、初臨の中にも再臨を、「神の国」の完成を指し示しておられるからです。

4. 東方の博士たち

では続く2章に記された出来事も、「神の国」のご計画の視点で見てください。これもまたクリスマス物語としてよく知られる出来事です。イエシュアの降誕を祝うためにやって来た、東方の博士たちについての記述です。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

2:1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。

2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」

2:3 これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

2:4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。

2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。

2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」

2:7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。

2:8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。

2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。

2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

2:12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

先ほどの1章の出来事と、この2章前半に記された出来事とは、登場人物や背景は異なりますが、実は構造としては全く同じです。

聖書箇所	異なる存在		旧約聖書の預言
マタイ 1:18~25	マリア	ヨセフ	2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたは…。(イザヤ書 7:14 の成就)
マタイ 2:1~12	東方の博士たち	ヘロデとその民	1:23 「見よ、処女が身ごもっている。そして…。(ミカ書 5:2 の成就)

このように、どちらも異なる二つの存在とイエシュア、そしてイエシュアについての旧約聖書の預言によって構成された記述となっているのです。これは聖書の中で数多く見られるパラレリズム、つまり同じ内容のメッセージを、言葉を置き換えて繰り返し、その意味を深めたり強調したりする、並行法と呼ばれる表現方法であると考えられます。先ほどの1章のヨセフとマリアの中にイスラエルと教会の「型」があり、この両者がイエシュアによって一つとなるという神のご計画が表されていることを述べました。それが、その事実がこの2章では、ヘロデと東方の博士たちに置き換えられて、再び表され、強調されているということです。つまり1章ではヨセフを中心としてイスラエルの視点から見た神のご計画が表されていましたが、この2章では東方の博士たちを異邦人の教会の「型」として、そしてヘロデとその民をイスラエルの「型」として、今度は教会の視点から神のご計画を表していると考えられます。すなわち、ヘロデより

も先に博士たちがイエシュアを見つけ、「ひれ伏して礼拝した。」という出来事の中に、ユダヤ人よりも先にイエシュアをメシアとして信じた教会の姿が表されているということです。

そしてこの後、ヘロデはイエシュアを殺そうとし、さらに二歳以下の男の子を皆殺しにするという悲劇をその地方一帯にもたらします。しかし東方の博士たちはこの出来事に一切関わることなく「2:12…別の道から自分の国に帰って行った。」とあります。ここには終末預言にあります、イスラエルの民に降りかかる大患難（時代）の事実と、それに一切関わることなく地上から引き上げられる教会の空中携挙の事実が表されていると考えられます。

このように、ヨセフとマリア、そして東方の博士たちとヘロデたち、この二つの出来事には神の国の民となるイスラエルと教会の「型」が表されていると考えられ、またそれぞれにイザヤ書 7:14、ミカ書 5:2 の二つの預言の成就が記され、ここに表された神のご計画も同様に、必ず成就する、実現するのだ、ということが強調されて表されていると考えられます。

5. 現実

イエス・キリスト、メシアであるイエシュアは救い主です。人類を、またこの世界全体を救われる御方です。ではその救いとは何か、どのようにして救われるのか。それはまずイエシュアを自分のうちに宿すこと、つまりイエシュアを信じ、心に受け入れることです。マリアが聖霊によってイエシュアを身ごもった出来事に、それが「型」として表されています。そのイエシュアを信じ受け入れた人の集まりを「教会」と呼びます。イエシュアはやがて私たち教会を天に引き上げる、携挙するために迎えに来られます。しかしそれで終わりではありません。イエシュアは地上に残されたイスラエルの民、ユダヤ人たちと私たち教会を一つに結び合わせて、自ら王となり、この地上にご自分の王国をお建てになります。それが「神の国」と呼ばれる、イスラエルの父祖アブラハムと交わされた契約（創世記 12:1~3）の成就です。このようにして神は人を御救いになるのです。今日取りあげた二つの出来事には、そのご計画が「型」として表されていると考えられ、神はご自分の御心、すなわちこれからご自分がしようとしておられることを告げておられるのだと思われます。

神の御業、ご計画は決して精神的なもの、実体のない抽象的なものではありません。そうでなければ神によって創造された今のこの世界も、そして私たちも、このような形のある、目に見える、触れて感じることのできるものではなかったでしょう。私たち教会も、イスラエルの民も現実に存在します。イエシュアも確かに人の形となって、イスラエル人として、ヨセフとマリアの子としてお生まれになりました。ですから神の救いの御業もまた、現実に実体となって、イエシュアとイスラエル、また教会による「神の国」として現れるのです。私たちはこの事実を信じ、受け入れ、理解し、そして待ち望む者として今ここにいます。確かに信じること、信仰とは、目に見えないものに対するものですが、正確には、今は見えなくても、やがて必ず見える形となって現実となって現れる、ということを経験することです。神のご計画「神の国」は必ずこの地に実現します。その日を信じ、期待し、求めてまいりましょう。